

幕末明治の写真師列伝 第九十一回 宮下欽 その十三

松代藩の一番小隊、遊撃分隊、八番大砲隊（砲1門）と長州藩、尾州藩、松本藩の兵は、来伝村より半蔵金村に転進して、ここに5か所の砲壘を築いて、各藩の半数の兵がこの砲台を守り、残りの半数は半蔵金村に宿営して敵に対していた。半蔵金村は征討軍本営の栃尾から南三里、長岡より東三里の山谷の間にある部落で、北には荷頃、新町に、南には守門、下村、上村へ、東には森上村に通じる道がある要衝の地であり征討軍にとっては重要拠点であった。

同盟軍の動向を事前に探索していたところ、6月22日早朝、森上村方面より3隊に分れて同盟軍が攻めてきた。これに直ちに応射して反撃する。弾丸は雨霰のように飛び交い、同盟軍は大砲も撃ってきて激戦となった。この戦いでは同盟軍が密かに山の背後を回って樹木の間より銃撃してきたため、本道を守備していた松代藩兵は四方向より攻撃を受けて、瞬間に7名の重傷者が出てしまった。しかしながら、松代藩兵はこの攻撃に屈せずこの地を死守した。この状況から局面の打開のために、まずは背後の敵を殲滅することにし、兵を分けて敵に反撃することにした。この作戦が成功して、敵の直前に出て銃を乱射して、敵を敗走させる。また、1隊は長州藩兵を救援するために左右の山へ、尾州藩兵、松本藩兵を展開させて同盟軍に反撃する。これにより薄暮に到って、同盟軍は攻撃を諦めて栃尾、荷頃方向に撤退していった。この日の戦いは暁より薄暮までの長時間の戦いで、一時は苦境に陥ったが、松代藩兵隊長蟻川の適切な指揮と、各藩兵の働きにより、同盟軍を敗走させることができた。

7月1日、各藩に連絡の上、栃尾口の敵を攻撃するために進軍することになった。その目標は戦略要地である栃尾の占領にあったが、当面の目標地点は田之口、栗山沢、西中野俣となる。進軍の部隊は、松代藩の一番小隊、遊撃分隊、八番大砲隊（砲1門）と長州藩奇兵隊、長府藩報国隊の5部隊の兵である。半蔵金村を出発して、中野俣村の西の間道を進み、中野俣村の東の山上に砲壘を築いて反撃してきた敵を、長州藩奇兵隊と松代藩遊撃分隊が直ちに攻撃して、敵を敗走させる。征討軍を阻止するべく敗走した同盟軍は後退して木山沢村の北側高地に集結、布陣する。この同盟軍を攻撃するために、征討軍側は攻撃部隊を、以下の二つに分けて進撃する。第1隊は長州藩奇兵隊、松代藩の一番小隊の半数、松代藩八番大砲隊（砲1門）、第2隊は長府藩報国隊、松代藩の一番小隊の半数、松代藩遊撃分隊。

この地も正面の地形が峻嶮のため、左右に攻撃部隊を迂回させて、激しく攻撃することにしたため、夕刻には敵は敗走して、この敵を追って荷頃村まで進撃することができた。ちょうどこの時、一之貝口より進撃していた中央進撃部隊の薩摩藩、長州藩、松代藩四番小隊の部隊も荷頃村を守っていた長岡藩兵に対して猛攻撃して、敗走させて、砲壘を占領していた状況であった。ここで軍は合流して、協議の上、中央進撃部隊の薩摩藩兵は一之貝に帰り、その地を守衛することにし、松代藩兵、長州藩の右翼進撃部隊は田之口村に陣し、本道の荷頃口と間道の天狗沢に砲台を築いて、これを守るようになった。

一方、敗走した同盟軍は退路をふさがれて、吹谷から山に入

り、道なき道を登って、谷を越え、刈谷田川まで辿り着き、ようやく栃尾の同盟軍本拠地にたどり着いていた。同じ7月1日、出雲崎に配備されていた松代藩の二番小隊、五番狙撃隊の2隊と薩摩藩、高田藩の大砲部隊（各1門）は、暁に沢田村を出発して藤巻村に着き、さらに斥候を出して敵の情勢を探知しながら進撃して、馬草村の御経塚を占領した。到着と同時に直ちに砲台の築造を始めたが、これに対して同盟軍が鉄砲を猛射撃して、砲壘の築造を妨害してきた。この攻撃をもとめせず応戦して、ついには砲台の築造を完成させると、この新砲壘により砲撃も始め、反撃する。この戦いは暁より翌2日の暁まで続き、松代藩2隊の銃弾は8000発を撃ち尽くすという激闘であった。

この部隊は7月14日までその後もこの地を連戦して守っていた。この戦いでは松代藩の二番小隊隊士、中曾根良作と小林孝太郎の2名が戦死し、出雲崎の八幡神社境内に埋葬された。（後に郷里の寺に改葬）その他に松代藩兵は7名の負傷者を出している。

7月6日早暁、荷頃村右方向の陣ヶ嶺山上より、同盟軍は征討軍の砲台を狙って攻撃してきた。この時、松代藩一番小隊の半数は十二ヶ森という地名の場所にいたので、この部隊から分隊を出して、長州藩の兵と共に尾州藩兵守備の陣ヶ嶺の前面に進出して奮戦し、砲撃により敵を敗走させた。その後、直ちにこの場所に新たに砲台を築いた後で、帰隊した。松代藩の砲隊は長州藩兵と共に進み、荷頃村の宗源寺山に入り、壘を築いて砲撃してこの地を守備する。この戦いでは松代藩一番小隊の佐々木作治が戦死し、長岡蔵王社に埋葬された。また与板で手負となった五番小隊の岡沢要之助も後に亡くなり、与板の八幡社に埋葬された。（どちらも郷里の寺にも墓はある）

7月16日早暁、亀崎村砲台在陣中の松代藩三番小隊、八番狙撃隊の2隊と長州藩兵の1分隊は、椿沢村に斥候して、同盟軍側の斥候基地を破壊し、その夜、その基地守衛の兵を迫撃する。この奇襲により同盟軍は各壘を捨てて敗走したので、亀崎村に帰隊した。この戦いでは大砲方の古川喜栄治が負傷して、後22日に破傷風により亡くなった。これもその遺骸は長岡蔵王社に埋葬された。（郷里の寺に墓はある）

ここで状況をもう一度整理すると、4月19日、20日、21日と松代を出発した松代藩兵は、飯山戦争を経て、越後に入り、高田より小千谷、榎峠の戦いを経て、長岡城まで進軍するも、長岡藩の河井継之助により7月25日に長岡城を奪還されて、その後は征討軍側の態勢立て直しのために一時、撤退することになるのだが、各所を守衛していた松代藩部隊はこの間の戦いで、多大な戦死傷者を出していた。この長期化した越後戦線の状態を憂慮した新政府は、新たに大部隊を増員してこの戦線に投入することになる。

一方、同盟軍の方は長岡城を再奪還のための長岡進入主力部隊の動きを征討軍側に察知されないように、各所に牽制の軍を出して征討軍守衛の砲壘を襲撃させていた。これにより征討軍各部隊の指揮の混乱を狙うと共に、征討軍の士気の低下と戦意の喪失を狙っていた。

（森重和雄）